

「自分」束縛に関する一考察

——英語代名詞のよりよい学習に向けて——¹

花崎美紀・花崎一夫²

1. はじめに

英語を専門としない学生に英語を教えていると、(花崎一夫：薬学・応用生命，花崎美紀：繊維・農学)，普段は気がつかない日本語と英語の差異に気づかされることが多い。英語学習者がしばしば間違える品詞の一つに代名詞がある。その中でも，再帰代名詞形の *-self* の学習は，非常に困難であるようである。以下は，学習者コーパスにみられる，*self* 形の間違いである。³ (スペルミス等の間違いもあるが，そのまま載せることにする。)

(1) But, people can learn English for *self*.

“しかし，人々は，自分のために英語を習うこともできる”

(2) I hope that everyone keep precious *thierself* and have a world wide view.

“皆が自分を大切にし，かつ，世界的な視野を持つことを望む”

(3) There is not plases that we can make *ourself* understood in Japanese.⁴

“日本語で自分の言っていることを分かってもらえるような場所はない”

(4) According to find new *myself*, and new world, English is most important thing.

“新しい自分をみつけ，新しい世界をみつけるために最も大事なことは，英語である”

(5) Nothing short of *myself's* effort, perseverance and aspiration will realize my hopes.

“自分の努力，忍耐，向上心が欠けていると，私の夢を実現できない”

(6) In English conversation to insist of *oneself* opinion is very important or common knowledge.

“英語による会話において，自分の意見を主張することは非常に重要であり，(英語話者にとってそれをすることが必要であることは) 皆が認識していることである”

上の誤用例をみると，(1)，(2)，(3)のように語自体を間違えていることもあるが，これら

¹ 本稿の執筆に際して，信州大学人文学部加藤敏三助教授から貴重なコメントを頂いた。ここに付して御礼申し上げる次第である。もちろん，本稿の瑕疵は，筆者達にある。

² 新潟薬科大学 薬学部

³ データは，筆者達自身の授業で書かせたもの，および，「昭和女子大学学習者コーパス研究会」のコーパスからのものである。

⁴ *ourselves* という語は，コーパスを使って，どのように語が使われているかを元に辞書を編纂している Cobuild によると，sometimes used instead of “ourselves” when it clearly refers to a singular subject とある。しかし，sometimes であるので，まだまだ受け入れられた用法であるとは言い難いといえる。

すべての語が「自分」と訳せるところをみると、「自分」と self 形の語の分布が違うにもかかわらず、「自分」という語の分布が少なからず英語に影響を及ぼしているのではないかと推察できる。

では、「自分」と self 形は、どう分布が違うのであろうか。「自分」は、「自分が」と言う形で従属節主語、「自分の」という形で名詞句の指定辞位置で使われることが多く、「自分を」という目的語で使うことは非常に少ない。⁵ 他方, self は、ほとんどが目的語の位置に現れ、従属節主語、属格で現れることはできない。(5), (6)は、属格で現れる「自分」という語をそのまま self 形に訳した形と言える。

よって、英語を学習する日本語話者に、日本語の「自分」と英語の再帰代名詞 self の分布の違いを認識させることは有効であると思われる。本稿では、英語代名詞のよりよい学習に向けて、「自分」という語の振る舞いを明らかにするものである。

Clements (1975) の主張によれば、意識主体照応的代名詞（以下、意識主体照応形）は、普通の名詞とは異なり、その先行詞は伝達されている発話・思考・感情・意識の主体でなければならない。本稿では、この考え方に基づいて、「自分」も一種の意識主体照応形であるとみなし、その先行詞は伝達されている発話・思考・感情・意識の主体でなければならないという立場をとり、最終的にどのような原則にしたがって「自分」の先行詞が決まるのかを考察したい。

生成文法では、「自分」に代表される長距離照応形の分布を捉えるために、主に3つのアプローチが提唱された。1つめのアプローチは Yang (1983) や Giorgi (1984) などに見られるもので、長距離照応形にとっての統率範疇は存在しないために、束縛理論 A が適用されないというものである。しかしこの考え方は、長距離照応形の先行詞を決める原則はないと言っているのに等しく、到底受け入れられるものではない。2つめのアプローチは Manzini and Wexler (1987) に代表されるもので、長距離照応形の束縛領域をパラメーター化し、言語ごとに見られる照応形に対応する形で束縛領域が異なるという主張を行うものである。第2節でこの主張を概観し、その問題点を指摘することとする。3つめのアプローチは LF における照応形の繰上げを行うことで「自分」に代表される意識主体照応形の主語指向性を説明しようとするものである。本稿では、第3節において Katada (1991) をその代表例として紹介し、その問題点を指摘することとする。第4節では、これら3つのアプローチの代案を、「自分」の先行詞を決める原則を探ることを通して提示することにする。

2. 束縛領域のパラメーター化

本節では、束縛領域のパラメーター化を提唱した代表的な論文、Manzini and Wexler (1987) をとり上げる。その前提となるのが Chomsky (1981) の束縛理論 A, 束縛理論 B であり、それは以下のとおりである。

(7)A. 照応形はその統率範疇内で束縛されなければならない。

B. 代名詞はその束縛範疇内で自由でなければならない。

⁵ 「自分は」と言う形で、主節の主語として現れる用法も最近は増えてきた。

- (8) β が α を束縛するのは、 β が α を c 統御し、かつ β と α が同一指標を付与されているときである。

もちろん上記の定義だけでは「自分」をはじめとする長距離照応形の分布を捉えることはできないため、Manzini and Wexler (1987) は、5つの値 ((9)の定義の a~e) に基づいた統率範疇のパラメーター化を行い、統率範疇の定式化を試みたわけである。

- (9) γ が α にとっての統率範疇であるのは、 γ が、 α と α の統率子を含み、以下の a~e のいずれかを持つ最小の範疇であり、かつそういう場合のみである。
- a. 主語または
 - b. Infl (屈折要素) または
 - c. 時制または
 - d. “指示的” 時制または
 - e. ルート (root) 時制⁶ (Manzini and Wexler 1987: 419)

上の定義に従って考えると、日本語の「自分」の統率範疇は(9)の e を含む場合であるということになる。これにより以下のようなデータは適切に説明できることになる。

- (10) 太郎_iは花子_jが自分_{ij}を憎んでいると思っている。
 (11) 太郎_iは花子_jが自分_{ij}のことを誇りに思っていると信じている。

(10)(11)において、「自分」の統率範疇は母型文 (最大の S) であり、その中で「自分」は適切に束縛されているので問題がないことになる。

しかしながら、Hanazaki (1996) でも指摘したように、この分析は以下に述べる2点において問題を抱えているといわざるを得ない。

第一に、この分析では、「自分」の主語指向性を適切に説明することができない。以下のデータを見てほしい。

- (12) 太郎_iは花子_jが次郎_kに自分_{ij/*k}のことを話したと思っている。

Manzini and Wexler (1987) によれば、(12)において次郎も「自分」の先行詞になれることが予測されるが、実際には先行詞にはなれない。したがって、この分析ではまずいことになる。

第二に、「自分」の先行詞と考えられる名詞句が、「自分」を c 統御していない場合、この

⁶ Manzini and Wexler (1987) によれば、指示的時制とは、その特性が本質的に定められているもので、直説法 (indicative) 時制がつねにそれにあたる。一方、対立概念としてとり上げられている照応的時制とは、その時制よりも上位の時制によってその特性が決定付けられる時制で、つねに仮定法時制となるものである。また、ルート時制とは、ルート文 (S 以外の節点に支配されていない S 節点) のもつ時制と考えて差し支えない。

分析では説明できないことになる。以下のデータを見てほしい。

- (13) a. 自分_iの写真が太郎_iを不安にさせた。
 b. 花子が自分_iを憎んでいることが太郎_iを悲しませた。
 c. これらの自分_iの写真が太郎_iが自叙伝を書くのに役に立った。
 d. タイム誌に記載されていた自分_iの写真が太郎_iの思考を支配した。

(13) a において、太郎は「自分」をc統御していないにもかかわらず、先行詞になっている。同様のことは(13) b～(13) d についてもいえる。したがって、c統御に基づいて束縛を考えている限り、上記のようなデータを説明することは不可能であり、この点において、束縛理論のパラメーター化を行った Manzini and Wexler (1987) の説は到底支持することはできない。

3. LF における照応形の繰上げ

このアプローチの基本的な考え方は、Chomsky (1981) の束縛理論を保持しつつ、再帰代名詞を、長距離照応形と局所的照応形に分類し、両者に LF における繰上げを適用することでそれらのふるまいを捉えようとするものである。この分析によれば、長距離照応形は LF で主語によってのみc統御される位置へ繰り上げられるのに対して、局所的照応形は主語や目的語のどちらによってもc統御される位置へ付加されることになる。日本語の「自分」を中心とした分析に Katada (1991) があるので、以下、簡単に概観し、その問題点を指摘したい。

Katada (1991) によれば、「自分」は主語指向性を持つ長距離照応形で、LF で A'位置へ繰り上げられる。⁷ 以下が、「自分」が繰り上がった場合の LF 表示である。

- (14) ...NP₁が [VP 自分 [VP...NP₂に... [CP*...t-Case (語彙統率される痕跡) ...]]

ここで CP*とは節がない場合もあるし、1つ以上ある場合もあることを表す。(Katada 1991 : 296)

この表示によると、「自分」がc統御されるのは主語の NP₁ によってのみということになり、「自分」の主語指向性が説明されるというのがこの分析の要点である。

しかしながらすでに指摘したように、「自分」の先行詞は主語だけに限られるわけではない。以下のデータは、(13)のデータとタイプの異なるもので、かつ主語以外のものが「自分」の先行詞になっている例である。

- (15) a. 太郎_iは花子_jから次郎_kが自分_{i/j/k}を憎んでいると聞いた。

⁷ Katada によれば、「自分」は、「彼自身」のような、三人称、単数、男性といったような素性を持っていない。したがって、一般的に演算子(数量詞繰上げによって A'位置に付加された要素など)の持っている性質を「自分」は持っていると考えて、「自分」は演算子的照応形(operator anaphor)であるとした。さらに Katada は「自分」を、LF で動詞に付加する演算子であると考えた。

b. 太郎は花子_iに自分_iの家に来るように頼まれた。

また、主語であれば必ず先行詞になれるというわけでもないことは以下のデータからわかる。

(16) a. 花子_iは太郎_jが自分_{i/j/k}を憎んでいることを次郎_kが知っていると思っている。

b. 花子_iは太郎_jが自分_{i/j/*k}を憎んでいることを私_kが知っていると思っている。

(16) a ではすべての主語が「自分」の先行詞になれるのに対して、(16) b では中間の高さに位置する主語の私が「自分」の先行詞になることができない。Katada (1991) にとっては、このようなデータは説明できないことになる。さらには、以下のようなデータも彼女の分析にとっては問題になる。

(17) 太郎_iが皆に、高木先生_jが自分_{*i/j}の子供をお叱りになったことを話した。

上例において、「自分」の先行詞が、太郎になることはないと思われるが、Katada (1991) では、主語ならば理論上先行詞になることが可能になってしまう。以上のことから、「自分」束縛の現象を正しく捉える理論としては、LF における照応形の繰上げを考えただけでは不十分であることが明らかになったと言えよう。

4. 「自分」束縛に関する代案

まず、「自分」はスタンダードな束縛理論の適応範囲外であることを保証するために、Reinhart and Reuland (1993) で提唱された束縛条件 A, B を援用することとする。

(18) A. 再帰のマークがつけられた述語は再帰的である。

B. 再帰的述語は再帰のマークがつけられている。

(19) 定義

a. ある述語が再帰的であるのは、その述語のとり 2 つの項に同じ指標があたえられている時、そしてその場合に限る。

b. ある述語 P に再帰のマークがつけられているのは、P が語彙的に再帰的であるか、P のとり 項の 1 つが SELF 照応形の時、そしてその場合に限る。⁸

上記の束縛条件を採用することにより、単一形態素からなる「自分」は再帰のマークを述語に対してつけられないことになり、よって(18)の束縛条件 A は「自分」に対しては適用されないことになる。

以上から、「自分」が束縛条件の適応範囲外であることが保証されるわけだが、「自分」の分布、ひいては「自分」の先行詞がいかにかに決まるのかという問題は残ることになる。以下、

⁸ SELF 照応形とは、英語の *himself*、オランダ語の *zichself*、ノルウェー語の *seg selv* に代表される照応形のことで、2 つの語が合成されてできた照応形をさす。

Sells (1987) の枠組みを用いながら上記の問題に対する解答を探っていくこととする。

Sells (1987) では、談話における3つのプリミティブな役割、SOURCE, SELF, PIVOT が提唱されている。SOURCE とは出来事の報告を行う者をさし、その代表例は話者である。SELF とは、その心的状態や態度が報告されている者を表し、PIVOT とは、その人の視点から報告がなされている者を表す。

本稿でも Sells (1987) の3つの役割を用いるが、それらを、ある名詞句の先行詞性（どのくらい「自分」の先行詞になる可能性があるか）を測る基準として採用することとし、Sells (1987) を発展させた以下の原則を提案する。

(20) 先行詞性の度合い（以下、先行詞度）

ある名詞句の先行詞度が1以上の場合、その名詞句は「自分」の先行詞になる可能性がある。先行詞度は以下のように測られる。SOURCE には3ポイント、SELF には2ポイント、PIVOT には1ポイントが与えられる。さらに、ある名詞句が自己指向性述語の外項である場合には1ポイントが与えられ、非自己指向性述語の外項である場合には-1ポイントが与えられる。また、ある名詞句が、上記のどちらの述語にも属さない場合にはポイントが与えられない。

- (21) a. 自己指向性述語とは、自己に向けられた行為を意味している述語をさす。
 b. 他者指向性述語とは、通常、他者にたいして向けられる行為しか意味することのできない述語をさす。⁹

以下、(20)の談話上の原則が「自分」に関するデータをどのように説明することができるかを見ていきたい。

まず、「自分」には主語指向性があるわけだが、その例を再び取り上げてみたい。

- (22) 太郎_iは花子_jが次郎_kに自分_{i/j/*k}のことを話したと思っている。

(22)において太郎はSELFであるから2ポイントが与えられる。一方、花子はSOURCEであるから3ポイントが与えられる。これに対して次郎にはポイントが与えられないので、「自分」の先行詞にはなれないことになる。

次に、先行詞と考えられる名詞句が「自分」をc統御していない例を見てみることにする。

- (23) a. 自分_iの写真が太郎_iを不安にさせた。
 b. 花子が自分_iを憎んでいることが太郎_iを悲しませた。
 c. これらの自分_iの写真が太郎_iが自叙伝を書くのに役に立った。
 d. タイム誌に記載されていた自分_iの写真が太郎_iの思考を支配した。

⁹ ここで他者に対して向けられるといているのは、述語の内項（典型的には目的語）として他者をとる述語のことをさす。したがって「話す」というような述語は、他者指向性述語には含めないこととする。

これらの例も、(20)を仮定すれば簡単に説明が可能である。すなわち(23)の例における太郎はいずれも SELF を表すと考えられるので2ポイントが与えられ、「自分」の先行詞になると説明することができるのである。¹⁰

さらに、以下の例をみれば、(20)の原則が Sells (1987) よりもすぐれていることがわかる。

- (24) a. 花子_iが自分_{*i/j}を無視したことが太郎_jを憂鬱にした。
 b. 花子_iが自分_{i/j}を責めたことが太郎_jを憂鬱にした。

(24) a と (24) b の重大な相違点は、前者においては太郎しか先行詞になれないのに対して、後者においては太郎と花子が先行詞になれることである。(20)にしたがって説明すると、(24) a の花子は PIVOT でありうるので1ポイントが与えられるが、と同時に花子は無視するという他者指向性述語の外項でもあるので、-1ポイントが与えられることになる。したがって、合計0ポイントということになり、「自分」の先行詞にはなれないと説明される。また、太郎は SELF なので、2ポイントが与えられ、「自分」の先行詞となることができる。一方(24) b の花子は PIVOT であると同時に自己指向性述語の外項でもあるので、合計2ポイントが与えられ、「自分」の先行詞になることができる。太郎に関しては(24) a のそれと同様の説明が可能である。

さらに、「自分」の先行詞となりうる名詞句が1つの文のなかに2つ以上ある場合、(20)を仮定し、与えられるポイントが高い順に先行詞として選ばれやすいと考えれば、その潜在的先行詞のうちどれが先行詞として選ばれやすいかということストレートに説明することが可能である。¹¹

- (25) 太郎_iは次郎_jから花子_kが自分_{i/j/k}を責めたと聞いた。

筆者自身も含めた日本語を母語とする話者の直感によれば、(25)において「自分」の先行詞として最も選ばれやすいのは次郎であり、2番目が花子、3番目が太郎である。ここで(20)に基づいて各名詞句にポイントを与えると、SOURCE の次郎には3ポイント、PIVOT であり、自己指向性述語の外項である花子には2ポイント、PIVOT の太郎には1ポイントが与えられることになる。これは先行詞の選ばれやすさの順位と見事に一致している。

次に第3節で問題例としてとり上げた(16)の例を再び(26)としてとり上げ、検討してみたい。

- (26) a. 花子_iは太郎_jが自分_{i/j/k}を憎んでいることを次郎_kが知っていると思っている。
 b. 花子_iは太郎_jが自分_{i/j/*k}を憎んでいることを私_kが知っていると思っている。

¹⁰ (23)のcやdの太郎は SELF であるとする。すなわちcの「役に立った」やdの「思考を支配した」は広い意味で太郎の心的状態を表していると考えることとする。

¹¹ 先行詞が複数ある場合に、どれが先行詞として選ばれやすいかは、その1文だけをコンテキストに関係なく検討し、母国語話者の直感に基づいて決めるものとする。

(26) a において花子はSELFであるので2ポイントが与えられ、太郎はPIVOTであると同時に自己指向性述語の外項であるので2ポイントが与えられる。一方、次郎はPIVOTであり得るので、1ポイントが与えられる。このことは、(26) a において、花子と太郎の方が次郎よりも先行詞として選ばれやすいという日本語の母語話者の直感をストレートに反映していると言える。しかしながら、(26) b において、私はPIVOTになり得るにもかかわらず、先行詞としては選ばれないというのが日本語の母語話者の直感である。この事実はいったいどのように説明したらいいのだろうか。次の例を見てほしい。

(27) a. 太郎_iが自分_{i/j}を憎んでいることを次郎_jが知っている。

b. 太郎_iが自分_{i/*j}を憎んでいることを私_jが知っている。

上例においても直感では、私が「自分」の先行詞になることは難しいように思われる。一方、(28)のように私が文頭にきた場合には先行詞となることが可能である。(ただし、私がではなく、私はにしたほうが自然である。)

(28) 私_iは太郎_jが自分_{i/j}を憎んでいることを知っている。

さらに(26) b も、以下の(29)のようにすれば私が「自分」の先行詞になることも可能である。

(29) 花子_iは私_jが太郎_kが自分_{i/j/k}を憎んでいることを知っていると思っている。

以上のことから、(26) b で私が先行詞になれないのは、主語の私が目的語の後に来ているために、「自分」と結びつけて処理することが難しくなっているためと説明することができよう。最後に前節で問題にした以下の例を見てみることにする。

(30) 太郎_iが皆に、高木先生_jが自分_{*i/j}の子供をお叱りになったことを話した。

この例はお叱りになったという敬語表現があるために太郎が「自分」の先行詞になれないことを示している。これは次のように説明できるだろう。お叱りになるという敬語表現は、その力を「自分」に対しても及ぼすので、その結果、「自分」が「ご自分」の意味に再分析され、その先行詞として最終的に選ばれるのは、敬意を示す対象である高木先生ということになる。

以上をまとめると、(20)の原則により、「自分」の主語指向性や、「自分」をc統御しない先行詞が存在する事実、さらにはどの先行詞が先行詞として選ばれやすいのかといったことまでもストレートに説明することが可能になったといえる。今後、もう少し詳細にデータを見ていく必要があるが、(20)に基づいて「自分」の先行詞の分布をとらえる試みは、母語話者の直感をストレートに反映している点ですぐれていると言えよう。

データ

「昭和女子大学学習者コーパス研究会」の英語学習者コーパス

参考文献

- Chomsky, N. (1981), *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Clements, G. N. (1975), "The Logophoric Pronoun in Ewe: Its Role in Discourse," *Journal of West African Languages* 2, 142-177.
- Giorgi, A. (1984), "Toward a Theory of Long Distance Anaphors: a GB approach," *Linguistic Review* 3: 307-361.
- Hanazaki, K. (1996), "Zibun as a Logophoric Pronoun," *Linguistic Research* No.13 (*Working Papers in English Linguistics*), 15-25, 東京大学英語学研究会.
- Katada, F. (1991), "LF Representation of Anaphors," *Linguistic Inquiry* 22: 287-313.
- Manzini, M. R. and K. Wexler (1987), "Parameters, Binding Theory, and Learnability," *Linguistic Inquiry* 18: 413-444.
- Reinhart, T. and E. Reuland (1993), "Reflexivity," *Linguistic Inquiry* 24: 657-720.
- Sells, P. (1987), "Aspects of Logophoricity," *Linguistic Inquiry* 18: 445-479.
- Yang, D. W. (1983), "Extended Binding Theory of Anaphors," *Language Research* 19: 169-192.